

博士論文(要約)

# 幼児の規範意識の変容過程に関する検討

辻谷 真知子

## 第 I 部 本研究の問題と目的

本研究の目的は、保育施設の集団生活の中で幼児が「規範」についてどのように捉えて他者に示しているのか、それらの捉え方や示し方がいかに変容するのかを明らかにすることである。幼児が学んでいく規範には、道徳的規則や生活習慣、遊び方のルールなど多様な内容が含まれる。本研究では、それらの規範についての幼児の捉え方を、3～5 歳児のやりとりの観察および 3～5 歳児への面接調査から考察する。そして、幼児の捉え方や示し方が発達および長期的な関係性の中でどのように変容するのかについて検討する。

人の集団には、従うべき事柄として共有されている様々な社会規範がある。子どもがそれらを最初に学んでいく場は、保育施設での集団生活である。これまで幼児期の規範意識については、保育学や発達心理学のアプローチで検討されてきたが、幼児が集団生活全体を通していかに規範を捉えて他者に示しているのか、およびその変容と幼児間の関係性との関連については明らかにされていなかった。また規範意識研究は、大人から見た望ましさの視点でなされることが多かった。そこで、本研究では規範を「保育場面で幼児が『～すべきである』と捉える・捉えうる社会規範」と広く定義した上で、保育場面における幼児の規範の捉え方と示し方の発達過程および変容のメカニズムについて明らかにすることを目的とした。

本研究は全 4 部 10 章からなる。第 I 部では、先行研究における課題と本研究の目的、理論的視座および方法について述べた。第 II 部では幼児個人の規範の捉え方や示し方について検討した上で、その知見をもとに第 III 部で幼児の集団における規範意識の変容について検討した。第 II、III 部の知見を踏まえ、第 IV 部で総合考察を行った。

この構成の意図は、集団にもとから存在する規範に幼児が従う行為等ではなく、幼児一人ひとりが規範を捉え、他者に示す中で、個人および集団の規範意識が変容していく過程とメカニズムを捉えることにある。

### 第 1 章 保育場面における幼児の規範意識の検討への視座

第 1 章では、幼児の規範意識についての知見を概観し、以下 3 点の課題を見出した。第一に、保育者が示す規範、幼児が共有したり作ったりする規範などは、それぞれ生活場面ごとに独立に検討されているため、生活全体を通じた幼児の捉え方は不明である。第二に、3 歳児の規範を示す言動や、4 歳までに可能となる領域固有性の理解などが論じられてきたが、幼児期を通じた規範意識の発達過程については示されていない。第三に、幼児間の仲間関係においては規範が排除に通じることも指摘されているが、幼児の規範意識との関連は不明である。以上 3 点を通して、集団の制裁や教育的な望ましさに限定されない、幼児

の視点での規範意識を捉える必要性が見出された。よって、本論文では①保育の集団生活全体を通した幼児の規範の捉え方・示し方を検討すること②幼児個人の規範理解の発達・変容過程について明らかにすること③集団における幼児間の長期的な関係性と規範との関連を検討することの3点を目的とした。

## 第2章 方法

特定の規範についての個人の捉え方の特徴や年齢に伴う変容は、同一の規範について複数の幼児に尋ねることにより検討できると考えられる。一方で、1つの規範についての捉え方が日常の集団生活にそのまま当てはまるわけではない。また規範は集団内で共有されており、可変的なものである。そのため特定の規範だけでなく、幼児が生活全体の流れの中で様々な規範をいかに捉えているのかについて、日常場面の観察から明らかにしていくことが必要である。このため、本研究では参与観察（第4,6～9章）と面接調査（第5章で分析し第6,9章で参照する指標として用いる）との両方を行った。参与観察においては、第3章で定める「規範を示す言動」を抽出し、前後の文脈とともに、幼児の規範の示し方・捉え方や他者関係について検討することを目的とした。第3,4,7章では本研究全体の手がかりとして新入園の幼稚園4歳児クラスの事例をもとにして、幼児の「規範を示す言動」や他者を基準とした判断について探索的に検討した。第6,8,9章では長期にわたり生活する保育所3歳児から卒園までの事例をもとにし、幼児による規範の示し方や捉え方の相違および集団の長期的な関係性についての分析を行なった。第5章の面接調査においては、幼児の捉えている規範の根拠の内容や想定する他者、それらの捉え方の発達過程を明らかにすることを目的とした。保育所3～5歳児の協力を得て、規範に違反する場面についての判断の根拠を問う調査を実施した。以上の観察調査と面接調査の結果をもとに、幼児個人間での規範の捉え方の相違や理解の発達、集団における規範意識の変容について考察することとした。

## 第3章 幼児の「規範を示す言動」の定義に関する検討

本章では、本研究全体における「規範を示す言動」の定義を明確にするため、幼児が保育場面において規範を示す場面を記録し抽出方法を定めた。

先行研究のコーディングおよび幼稚園4歳児クラス35名の観察データをもとに、「規範を示す言動」（以下「規範提示」）の定義づけを行った。この方法をとったのは、日本の保育の文脈における幼児の言動に基づいた定義がなかったためである。幼児の「～すべきである（ない）」と解釈できる発話や言動を全て抽出し、発話内容と文脈をもとにカテゴリーを作成した。カテゴリーには、善悪や正誤、命令、規範自体に言及する発話に加え、他者

に確認する言動、違反の報告や指摘をする言動、違反の結果を示す言動が含まれた。幼児1人が1つの規範を示した場合につき1事例として定めた上で、論文中では文脈も含めて分析するため、エピソードとして示した。

## 第Ⅱ部 幼児個人による規範の捉え方の検討

第Ⅱ部では、保育において幼児個人がどのように規範を捉え、示しているのかを明らかにするため、第4～6章の3つの視点から検討した。

### 第4章 4歳児間のやりとりに表れる「規範」の捉え方（研究1）

本章では幼児の規範提示に表れる捉え方を検討するため、4歳児クラス（35名）における規範提示342事例とそのうち根拠を示した42事例（12.4%）をもとに、根拠の内容と、規範が誰のためであるかという2点を分析した。その結果、根拠としては自身の主張の他、直接的結果や外的権威者等に言及する一方、園・クラスのための規範では幼児が根拠を示さない事例が多かった（113事例）。結果から3点が示唆された。

第一に、「規範を示す言動」の一部において、幼児は規範そのものだけでなく、違反した結果などの根拠を示している。第二に、幼児の言動には、提示する側の主張だけでなく、保育者や他児といった他者の存在が含まれる。第三に、集団で共有されている規範については、幼児は根拠を示す必要性を認識していないか、あるいは根拠そのものを認識していない可能性がある。ただし規範を示した幼児の言動をもとに分析を行ったため、規範を示すことが少ない幼児の規範の捉え方や発達過程は検討することができなかった。よって、次章（研究2）で検討することとした。

### 第5章 3～5歳児における規範理解の発達（研究2）

本章では、規範の捉え方の発達過程を明らかにするため、3～5歳161名を対象に2回の面接調査を行い、縦断データが得られた3歳児21名・4歳児38名の2回分（第2回時4、5歳児）を分析対象とした。幼児間のいざこざ等で問題となることの多い、かつ3歳児ですでに機能しているとされている「先占の尊重」規範に違反するストーリーを提示した。そして、悪いと判断する根拠および想定する他者（困る人/怒る人/教えてくれる人）を尋ねた。

違反の結果などの「推測」の有無、および被害を受ける相手などの「人物」への言及の有無について McNemar 検定を行った結果、「推測」には3歳で言及せず4歳で言及するようになる幼児が有意に多く（9名、 $p \leq .005$ ,  $V = .37$ ）、「人物」も3歳から4歳への変化が有意傾向であった（ $p \leq .10$ ,  $V = .25$ ）が3歳で既に12名（75%）が言及していた。推測の内容では、5歳児で複数の内容（生じる結果・被害者の感情等）に言及する幼児が増加した。さ

らに違反に対し「怒る人」「教えてくれる人」として、幼児は違反に直接関係しない他児や保育者にも言及しており、特に「教えてくれる人」としての他児への言及が5歳児で多く15名(43%)見られた。

結果から、3点が明らかになった。第一に、「推測」に言及しない回答から言及する回答へ変化する幼児は、3歳から4歳にかけての期間で有意に多い。第二に、4歳から5歳では、規範の根拠としての「推測」の内容が「被害者の感情」「生じる状況」というように複数になるなど、より精緻化する。第三に、規範の違反に際して「怒る」相手としては保育者、「教えてくれる」相手としては第三者である他児に言及されるが、このうち「教えてくれる」相手としての他児への言及は5歳児で多くなる。一方で、4歳から5歳にかけて、推測ありの回答から推測なしの回答へ移行する幼児が8名(22.9%)いたこと、3歳児でも推測を行う幼児が2名(12.5%)いたことなどから、解釈には大きく2つの可能性が残された。第一に、推測ができるようになることで規範の根拠の理解が進み、他者に示すようになるという可能性である。第二に、規範そのものを先に捉えており、その後、推測ができるようになることで規範を捉え直していくという可能性である。これら2つの可能性は共通の発達過程ではなく、幼児により異なることも考えられる。そのため、推測の有無が異なる幼児に着目し、回答及び実際の「規範を示す言動」をもとに、縦断的な変容を検討する必要がある。この点を踏まえ、第6章(研究3)にて検討した。

## 第6章 個人による規範判断・提示の相違と特徴(研究3)

本章では、幼児の規範の捉え方と示し方との関連を検討するため、第5章の面接データおよび保育所3歳児の卒園までの観察データをもとに検討した。3~5歳の長期的な変容を捉えるという目的があったこと、および新たな環境で慣習的な規範に意識的になる時期(第4章)と異なり、以前から経験している生活の中での規範の捉え方・示し方の変容を捉えるという目的があったことによる。第5章の結果(違反結果の推測の有無)が異なり、観察場面において規範提示の事例数が同程度(各119,120事例)であった2名の幼児(A,M)に着目した。幼児Aでは、他児に「善悪の確認」をする事例数が多く、根拠に言及する事例数が少ないが5歳児で自己主張を根拠とした規範提示事例が増加していた。幼児Mでは、他児に指摘をする事例数や規範の根拠に言及する事例数が多く、また主張を根拠に規範を示す事例数が3歳児から多かった。

結果の比較から、「規範を示す言動」の生じてくる3歳児の時期は、幼児によって自ら規範を示すのか、他者の判断を参照するのかという特徴の相違があり、その特徴が、個人の規範の捉え方・示し方の変容にも影響している可能性が示唆された。

### 第Ⅲ部 幼児の集団における規範と関係性の検討

第Ⅲ部では、第Ⅱ部の知見を踏まえ、集団の中で幼児が規範をいかに捉え、示しており、またそれらが幼児間の関係性の変容とどのように関連するのかについて検討した。

#### 第7章 保育者や他児を基準とした規範の判断（研究4）

本章では、第6章の知見をもとに、幼児が他者をいかに規範の判断基準とするのかを検討するため、幼稚園4歳児クラス2年分の観察データから、幼児が保育者や他児に「善悪の確認」を行う、すなわち「許可を求める発話」の見られた50事例を抽出し検討した。第4章と同様に幼稚園4歳児クラスとしたのは、新たな環境で幼児が規範に意識的になるため事例が捉えやすいと判断したこと、また入園からの変容をみる必要があることによる。この「許可を求める発話」は場面を通じて得られるわけではなく事例数が少なかったため、次年度も続けて調査したデータも合わせて分析を行った。

その結果、幼児は保育者(33事例)だけではなく他児(17事例)にも、遊びへの参入や物の使用等に際して許可を求めることが示された。また、その状況において「誰に許可を求めるべきか」ということも規範として共有されていることが示された。また保育者は幼児に対し、可否の応答のみならず幼児自身の考えを尋ねる、他児に聞くよう勧める等の応答をしていた。

よって、幼児は他児や保育者に許可を求めることで規範の判断基準とするが、その判断は相手の応答によって変容する可能性が示唆された。ただし、「許可を求める発話」には、その場の状況（相手が先に物を使っているなど）だけではなく相手との力関係が背景にあると示唆される事例もあったため、幼児間の長期的な関係性における「許可を求める発話」も同時に検討する必要性が示された。この点については第9章（研究6）にて検討した。

#### 第8章 幼児による規範の方略的な使用と示し方についての検討（研究6）

本章では、規範の示し方が幼児間のやりとりや規範の共有に与える影響について検討するため、保育所3歳児16名の卒園までの観察データから、根拠を示さない738事例と、そのうち特定の規範（言葉遣いの規範）に関する41事例に着目した。

その結果、幼児は規範そのものに相手を従わせるという意図だけではなく、自分の主張や反論を伝えるために規範を方略的に用いていることが示唆された。同時に、そのような規範が、根拠は示されずとも、幼児間で共有されていくということも明らかになった。

この「言葉遣いについての規範」は保育者が幼児間の言語的なやりとりについて働きかけたことがきっかけとなっていたが、幼児がそれを相手の説得に用いることにもつながっていたことが示唆される。以上から、規範を方略的に用いる幼児は集団の関係性で相手を説

得することができるが、反対に、そうではない幼児がどのように他児と関係性を築くのかについて詳細に検討する必要性が示唆された。この点も踏まえて、第9章（研究6）で検討した。

## 第9章 集団内の関係性と規範意識との関連の検討（研究1）

本章では、長期にわたりともに過ごす幼児の集団において、規範の捉え方や示し方およびそれらの変容が、集団内の関係性といかに関連しているのかについて検討することを目的とした。第6,8章と同様の観察データ1018事例から、クラス内における規範提示の宛先、示し方およびそれらの変容を分析した。

その結果、規範提示事例と提示対象になる事例が特に多い幼児1名が、他児の善悪確認（第7章）の対象となりうることが示された。次に、3歳児時点で規範提示事例が少なく他児に従うことの多かった2名の幼児（H,M）に着目した。いずれも3歳児において、他児の違反を保育者に報告することで判断する事例が見られたが、5歳児では、幼児Hは他児に自ら規範を示す言動や他児への反論が増加し、幼児Mは他児に追従して規範を示すが他児の規範提示に従うことが多いという相違がみられた。よって、3歳児での「規範を示す言動」の少なさには相違がなくとも、「自ら示したいができない」場合と、「示そうとしていない」場合とで規範意識は異なる可能性があることが示唆された。

以上より、幼児の集団における規範は、規範を示す幼児と示される幼児との間で変容すること、そして3歳児で規範提示が少ない幼児の中でも、他者をどのように基準とするのかという判断により変容過程が異なることが示唆された。

## 第IV部 総合考察

### 第10章 本研究の総合考察

第IV部「総合考察」では、上記第I～III部の知見をまとめ、集団における幼児の規範意識の変容について明らかになったことおよび今後の課題を検討した。本研究の知見は以下の3点である。

第一に、幼児の規範理解の発達過程と示し方の変容過程である。3歳では規範として従うべきものがあると捉え、他者に示していることが先行研究で指摘されてきたが、3歳から4歳で違反の結果等の推測が可能になることが第5章の知見から示唆された。そして、その推測内容は5歳にかけて精緻化し、同時に他者への規範の示し方も変容する（第4章）。また、違反により被害を受ける相手だけではなく、権威者（保育者）や第三者の反応も捉えているため、相手の違反を報告したり、善悪を確認したりする（第7章）。ただし、これらの規範理解の発達過程や捉え方の変容過程は、幼児が、他者をどの程度どのように規範の

判断基準とするのかによって異なる（第6,9章）。

第二に、幼児の集団において規範が共有されるメカニズムである。集団では、幼児が規範を捉えるきっかけが生じるだけでなく、いざこざや他児の違反、判断の迷いなど、規範を示すきっかけが生じる。そして、その「規範を示す言動」により規範が可視化される。規範は、反論などを伝える幼児の方略的な提示や、根拠のない提示によっても共有される（第8章）。その一方で、許可を求められた際に幼児自身に考えさせる保育者の応答に見られたように、規範の内容は、相手の応答により問い直される可能性がある（第7章）。そしてまた、幼児が規範を捉えるきっかけにつながる。これらの規範共有のメカニズムは、第一の点で述べた幼児の規範理解の発達過程や示し方の変容過程、および個人やその立場による判断の特徴によって影響を受けると考えられる（第6,9章）。

第三に、「規範を示す言動」が、幼児の集団内の関係性を検討する手がかりとなる点である。ここでは、主に自ら規範を判断して自己主張に用いる幼児（「自己基準型判断」とする）と、主に他者を基準として判断し、許可を求めることが多い幼児（「他者基準型判断」とする）の相違、および規範を示す言動の多寡から、変容のモデルを示した。3歳児で規範を多く示す自己基準型判断の幼児が、5歳にかけて、他児にとって許可を求める相手になる可能性がある。他者基準型判断の幼児も状況によって主張を行うようになること、規範提示の少なかった幼児が示すようになることなど、時期を経た変容も見られる一方で、3歳児時点での規範を示す・示されるという力関係が、5歳児での関係性にもつながっている。一方、5歳では幼児間でのやりとりが多くなることに伴い、保育者への確認や報告は減ると考えられる。ただし、主張の説得や相手との関係性の中で、保育者の指示などを根拠として持ち出すことが有効に働く（第4,8章）など、間接的に影響していると考えられる。また、以上のモデルはメンバーの入れ替わりがほとんどないというフィールドの特性や、幼児が自ら規範を示す言動に着目した本研究の視点による影響も考えられる。

以上3点より、本研究の意義と課題について述べた。

本研究の意義は、幼児の集団生活を通じた規範の捉え方と示し方について、発達過程および変容のメカニズムを明らかにしたことに加え、幼児の集団における長期的な関係性を「規範を示す言動」から捉える視点を示したことにある。ただし、今後の課題として、本研究で示した発達過程のメカニズムについて他の能力発達との関連を検討すること、観察調査に場面間比較や規範の内容による比較を取り入れて詳細に変容を捉えること、従来の仲間関係の知見を踏まえて規範の及ぼす影響をさらに検討すること、および保育者の援助やその元になる規範についての価値観を検討することが求められる。